

# 「God Is」(神がいる)に関するババの御言葉

---

## 神がいる

今日どこに行っても、シヴァラートリの名の下に、多くの雑音や騒音が聞こえます。世界中のどこにも、帰依心が付加されたこの種の神聖な雰囲気を見つけることはできません。プラシャーンティ ニラヤムでの催しはすべて、完全なる平安と調和のもとに執り行われます。すべてに愛と帰依心が付加されています。神は愛であり、愛は神です。神は愛を通じてのみ到達されなくてはなりません。ですから、あなた方は皆、プレーマスワルーパ(神の愛の化身)にならなくてははいけません。どこにしようと完全な調和をもって生きるべきです。憎しみに隙を与えてはなりません。対抗する人に会ったときでさえ、愛をもって迎えなさい。そうすれば、相手も自動的に愛をもって答えます。というのも、この世はすべて、反応、反映、反響で満ちているからです。たとえば、あなたの心に不安があるとします。それは外的要因のせいではありません。あなた自身の欠陥と落ち度が、不安という形をとって反映しているのです。

もし、あなたが幸せになりたいと望むなら、幸せのうちに生きなさい。シヴァ神、パールヴァティー女神、スッブラマニヤ神、ヴィナーヤカ(ガネーシャ)神という普遍的な家族は、この原理の完璧な模範像です。この神々の手本を習得しなさい。この神々を崇めなさい。しかし、注意することがあります。神の絵を神として崇めても構いませんが、神を絵として崇めてはいけません。ですから、このイーシュワラ(シヴァ神)の家族を、その模範を倣うことを通じて崇めなさい。

—Let Unity be the undercurrent everywhere (2003年3月2日のマハーシヴァラートリの朝の御講話より)

---

愛はあなたの唯一真なる永遠の財産です。しかし、あなたはその愛を、この世的な、くだらないものに向けています。愛は心の中で大切にし、神聖な目的のために使うべきです。愛はいくらでも多くの人と分かち合うことができます。愛は決して減ってしまうことはありません。あなたは真の意味で愛を理解して体験することができます。愛は決して減ってしまうことはありません。あなたは真の意味で愛を理解して体験することができます。愛はすべてのものの生命の息吹です。愛を理解するためには、愛という海の中に深く潜らなければなりません。愛はうわべでは理解できません。ですから、あなた自身が完全に愛の中に浸らなければなりません。この世的な愛は、味わってすぐに手放すことができるものです。しかし、ひとたび神の愛を味わったなら、あなたは二度とそれを手放すことはないでしょう。愛は神です。神は愛です。ですから、神から愛を切り離すことはできません。愛に生きなさい。これが、愛を理解し、神を体験する唯一の道です。

—Love and Unity –your true and eternal property (2005年4月9日のウガディの御講話より)

---

純粋な心(マインド)は、真珠貝の中の真珠のようなものです。世の中の生活は、海のようなものです。海の中で、あなたは人の肉体という真珠貝の中にある、純粋な心という真珠を見つけることができます。その真珠は、アートマ(真我)の真理です。それは非の打ち所もなく純粋で、属性をもたず、永遠不変です。その輝きと純潔さは他に比べるものがありません。アートマに足はありませんが、何よりも速く動きます。アートマには手はありませんが、すべてのものをつかみます。アートマには目はありませんが、宇宙の中で見えないものは一つもありません。こうしたアートマを体験するためのただ一つの方法は、愛の道です。あなたが愛で満たされているとき、容易に神に到達できます。神を愛しなさい。愛に生きなさい。

人生は、愛に生きなければなりません。歳月は来ては去ります。四季は移り変わります。戦争も起こるかもしれません。しかし、神の恩寵のひと雫でも持っていれば、あなたは何事をも達成することができます。このような恩寵を受け取るためには、目を内側に向けなければなりません。残念ながら、皆さんの目はすっかり外側に向けられています。あなたが何を見るかは、あなたの目が向いている方向によります。ですから、あなたの目をプレーマドリシュティ(愛の目)に変えなさい。

宇宙はミッティヤー(幻想)[真実と虚偽が入り混じったもの]であり、ブラフマン(絶対実在)のみが現実だと言われています。これは正しくありません。ジャガト(宇宙)もまた、現実です。もし、あなたが愛に満たされた目を持っていれば、全宇宙はブラフママヤム(絶対実在が浸透しているもの)に見えます。肉眼で世界を見るなら、世界は生まれてから死ぬまで苦悩の束に見えます。神への愛のみが、この苦悩から抜け出す唯一の道です。とにかく今、愛を手に入れなさい。私が皆さんに伝えられることで、これ以上重要なことはありません。

--Hold Fast to The Lord (1992年4月4日、Sathya Sai Speaks 第25巻10章より)

あるとき、小さな村に豪雨が降っていました。一人の僧侶が、予期していなかったこの雨に遭い、強い雨脚と冷たい風を避けるための避難所を探して、あちらこちら走り回っていました。僧侶は、一軒の家の少し高くなった軒先に、狭いながらも乾いた場所を見つけました。その家の住人は中でぐっすり寝ていました。ヨーギ(修行者)であったその僧侶は、心に何の重荷もなかったので、すぐに寝ついて前後不覚の眠りに落ちました。それからすぐに、もう一人、避難所のない哀れな男がこの軒先を見つけ、上がり込んできました。ヨーギは目を覚まし、もう一人困っている男がいるのがわかると、座り直して言いました。「二人が座るに十分な場所があります。ここへおいでなさい。二人で夜通し座って過ごしましょう!」。数分も経たないうちに、もう一人、必死に場所を探している男が来たので、その男も入れてあげなければなりません。座っていた二人は、立てば三人分の場所ができると意見が一致しました!そして、三人で夜明けまで立って過ごすことにしました。これが、困窮している兄弟に対して、神の子どもたちが培わなければならない寛容の心です。神は愛です。ですから、神に融合するには、あなたは愛にならなければなりません。神は美です。ですから、あなたの中に何一つ醜さのない美になりなさい。そうすれば、神と一つになれる。神は慈愛です。ですから、慈愛になりなさい。水は、油とではなく、水と容易く混じりあいます。油は油としか混ざりません。

-- Constant Divine Communion (1971年7月23日、Sathya Sai Speaks 第11巻29章より)

多くの方が帰依者としてここに来ました。スワミに対して、彼らは疑いもなく、深い帰依心を持っています。しかし、帰依(バクティ、信愛、神への愛)とは何でしょう? 帰依を特徴づけるものとは何でしょう? まず、これから分析しなくてはなりません。何よりも第一に、あなたは信じる心を培わなければなりません。

信じる心があれば、そこには愛があります。愛があるところには、真理があります。真理があるところには神がいます。真理は神です。真理を知るのに特別な努力をする必要はありません。事実、真理を悟るためには11秒あれば十分です。ただ、心で11秒間真理を黙想すれば、あなたは神のダルシヤン(貴い姿を見ること)を受けることができます。

--Always Be Happy and Peaceful (2007年7月28日の世界青年大会の御講話より)

神の中で、神と共に、神に付いて、神のために生きなさい。神を飲み、神を食べ、神を見、神に手を伸ばしなさい。神は真理であり、本質であり、人のハートです。「私はあなたのハートに住んでいる」とクリシュナは言いました。顕微鏡で見てもわかりませんが、人の身体のすべての細胞は神です。今、あなた方は私の話すことをカセットに録音しています。しかし、今、カセットの上に私の声や言葉が見えますか? いいえ、見えません。カセットを再生したとき、あなたは私の声を聞くことができます。それと同じように、人の体はテープです。神の声はテープの中に入っています。テープに信仰を備え付け、愛でテープを回しなさい。そうすれば、あなたは私の声と言葉を吸収することができます。純粋なハート、清潔なマインド、神で満たされた意識が、あなたの内なる神の声を聞く手助けをしてくれるでしょう。

--Daily Prayer (1983年1月18日、Sathya Sai Speaks 第16巻2章より)

真理は、隠されており、変形して見え、欠けていると宣言されています。ゆえに、アヴァター(神の化身)は、

真理の正当性と価値をもう一度主張します。神は真理を身にまっています。善は真理を求めます。悪は真理によって救出されます。真理は解放します。真理は力です。真理は自由です。真理は、心に光を与え、疑いと暗黒を払い除けるランプです。神の輝きは真理です。あなたの心に神を温かく迎え入れなさい。熱望の結果として神を心に据えなさい。常にブラフマンを気にかけていなさい。そうすれば、あなたはブラフミンとして知られる権利を得ます。

--*The Voice of the Ocean* (1969年7月29日、*Sathya Sai Speaks* 第9巻14章より)

---

正しい精神で行う奉仕はダルマです。奉仕は神を悟る道でもあります。神は愛と真理と平安の体現者です。ですから、神を悟るためには、愛を培い、真理を固守し、内なる平安を体験しなければなりません。人間の体は馬車であり、アートマはその御者です。体は違う姿や名前を持っているかもしれませんが、しかし、アートマは一つであり同じです。多様性に見えるものの下に敷かれている一体性を理解することが不可欠です。たとえば、空腹を満たす食べ物の種類は、皇帝から物乞いまで異なりますが、飢えはすべての人に共通しています。それと同じように、喜びと悲しみ、出生と死はすべての人に共通しています。アートマはすべての人に共通しています。

--*Born to Serve* (1987年11月19日、*Sathya Sai Speaks* 第20章26章より)

---

ブラフマーナンダ(ブラフマンの至福)は神の名前のうちの一つです。ブラフマーナンダは、神はつねに最高の至福の状態にあるという見解を伝えています。つまり、至福は神の姿であり、それゆえ、至福はブラフマーナンダと呼ばれる神なのです。こうした御名は他にもたくさんあって、[この講話の]初めに述べたものがそれです。次に来るのはパラマ スカダムで、これは「真の法悦」を意味します。このスカム[スカ](幸福や法悦)とは何でしょう？ それは体と結びついたものなののでしょうか？ それは肉体的なものなのか、感覚的なものなのか、それとも知的なものなののでしょうか？ スカムはそのどれをも超越しています。我らが古代人たちは、「タスマイ ナマハ」と言いました。この意味は、「私は幸福の化身なるお方に敬礼を捧げます」というものです。古代人たちは至高の法悦を描写しようとはしませんでした。神がまさにその化身であることを知っていたのです。そのため、古代人は神をパラマ スカダムと呼んで称賛したのです。神は幸福の権化であり、空間と時間、そして、人間の理性の限界も超えています。もし、人がパラマ スカダム、すなわち「超越的な至福」を描写するとしたら、ただ言えることは、それは肉体的なものではなく、理解可能な形もないということです。甘露には外観があり、その味は描写が可能です。けれども、パラマ スカダムは形と言葉の両方を超越しています。神は永遠の至福である——これ以外、何と言えるでしょう？ 神は、称賛と非難、(世俗的な)歓喜や悲哀といった、あらゆる対極による影響をまったく受けません。神はつねに幸福至極です。

--*God Is pure Bliss* (2000年5月23日、*Summer Shower in Brindavan 2000* 第10章より)

---

本当の自分はアートマです。人はこの事実を理解し、肉体と心と知性への執着を捨てなければなりません。アートマはマスター(主)です。これを理解し、マスターマインド(心の主たるもの)になりなさい。あなたをあなたの道具だと考えてはいけません。すべての器官、すなわち体の道具は、アートマから発せられた振動によって動かされています。その振動がなければ、人は生きていけません。人はこのアートマの原理を忘れ、幸福を失っているのです。人は幸福を装って微笑んでいるだけで、本当は幸せではありません。神は幸せの主です。そして、自分と神を同一視しない限り、あなたが幸せになることはできません。あなたが神を想い、神に祈るとき、些細なことをお願いするべきではありません。神にはあって、あなたにはないものをお願いするべきです。あなたの中にあるもの、それは至福です。そして、神は至福の化身です。ですから、あなたは至福だけを祈るべきなのです。

-- *Going Beyond the Mind* (1998年4月20日、*Sathya Sai Speaks* 第31巻第15章より)

---

神があなたに降りそそぐことのできる恩寵を求めて神を選んではいけません。あなたのこの世的で物質的な望みを神が満たしてくれると期待してはいけません。そして、それが成就しなくても、神への道を放棄してはいけません。「ババ、今晚私の夢に出てきてください」と、あなたは要求します。そして、それが実現しないと、ババはサイ ババではない、ライ ババ(石のババ)だと言い、あなたに手招きをして呼び声に応じてくれる他の神を探しに行くのです。成功や失敗、約束(アポイントメント)や失望(ディサポイントメント)——何が起ろうとも、あなたはしっかりと信仰心を保持していなければなりません。神はあなたの核であり、あなたの意識にしっかりと据えられているのですから、得意になったり、がっかりしたりする余地はありません。神は至福であり、神があなたの内なる決して枯れることのない泉であるとき、あなたは永遠に至福をもち続けるのです。

--Choose Your God (1973年11月23日、Sathya Sai Speaks 第12巻第21章より)

---

「常に至福に満ちて、幸福を与え、英知の化身であり、二元性を越え、空のように果てしなく、根源の、最終到達点で、一つで、永遠で、汚れない、不動の、遍在の目撃者で、感覚を越えた、三つのグナ(属性)のないもの」——それが神です。

神は海です。帰依者の感情と欲望は小川です。この二つが交わったとき、海はそのまま変わりませんが、小川は浄化されます。海は決して影響されません。他の例をとると、1カップの牛乳を10カップの水に混ぜたとすれば、牛乳の価値は下がってしまいます。しかし、1カップの水を10カップの牛乳に混ぜたとしたら、価値のない水は牛乳の価値を得ます。このように、二つのものを混ぜたとき、より純粋で、より多大なものの価値が、もう一つのものの方へ与えられるのです。

神は三つのグナ(属性)を超越しています。その神が、グナに縛られた人間のように振る舞うでしょうか？ クリシュナに対する人々の考えが何であれ、クリシュナは完璧で純粋で純潔でした。牧女たちがクリシュナの肉体に思いを馳せていたのは事実ですが、それでさえ不道德な意図は決してありませんでした。牧女たちは純粋で汚れを知りませんでした。意味のない学者たちの解釈は、人々の『バーガヴァタム』(ヴィシュヌ神の物語)の解釈を汚しました。神は常に純粋で無私です。そうした学者たちは、神を純粋さそのものよりも低いものと考えて、人々を欺いているのです。

--Dhurva (Summer Showers in Brindavan 1995より)

---

誰かが愛をこめて私と話をするとき、私の喜びは留まる場所を知りません。人々が、愛のない空虚な美辞麗句で私の性質を説明しても、私はまったく嬉しくありませんし、感銘も受けません。愛のこもったハートで私に話しかけなさい。愛に満ちたハートで私に祈りなさい。何であれ愛のこもったハートで祈ることには、私はすぐに反応します。皆さんが愛をこめて「サイ」と呼べば、私はすぐに「ハイ」と答えます。愛がなければ、どれほどたくさん祈っても、私を動かすことはできません。もし、あなたが愛をこめて私を呼べば、私はどこにいても、直ちに反応します。愛よりも偉大なものはありません。ですから、神のダルシヤンを受けて神を経験したいと思うのであれば、愛をこめて神に祈りなさい。皆さんがどれほどの富や美徳をもっていても、それは愛の性質とは比べものになりません。「プレーマ」という言葉に固有の甘美さは、それ以外のどこを探しても見つけることはできません。愛を培い実践すればするほど、皆さんの人格はますます甘美なものになるでしょう。ですから、愛を培って、それを皆さんに備わる最大の性質としなさい。

--The Form Of God is Love (2004年7月2日、グループルニマーの御講話より)

---

昔、クリシュナをさまざまな御名で呼んでいたサーダカ(修行者)がいました。その御名はそれぞれ、クリシュナの素晴らしい側面を表したものでした。サーダカは、「あなたが世話をしている牛たちの小屋から離れてください。一瞬でも私の所へ来て、私の渴きを癒してください」と祈りました。サーダカは木の下で悲しみにくれ、苦悩の涙を流していました。そこへ年老いた托鉢僧がやって来ました。サーダカはその僧に心の内をさらけ出し、自分が一番心待ちにしている望みが叶うよう、托鉢僧の祝福が欲しいと祈りました。しかし、托鉢僧はこ

う言いました。「神はすべての姿を越えている。神は姿に限定され得ない。神はすべての姿であり、また姿を越えている。どうして神が、おまえの恋い焦がれる姿をとって、目の前に現れることなどできるのだ?」。この言葉はサーダカの苦悩をさらに強めました。サーダカはよりいっそう真剣に、心に描いた神の御姿を切望するようになりました。誰が神のことを、これではなく、あれだけだと言えるでしょう? 神の自由を制限することは誰にもできません。神は托鉢僧の考えに縛られるでしょうか? 神は望まれた姿をとり、そのサーダカが受け取るに値した歓喜を与えました。あなたが他の人の信じている神の御姿や御名を非難したい衝動に駆られたとき、このことを覚えておきなさい。

-- *Inspiration, Nay Imitation* (1968年10月1日、*Sathya Sai Speaks* 第8巻第40章より)

---

## 神は・・・サット・チット・アーナンダ

神はさまざまな名前を持っていますが、その中で最も偉大で最もふさわしい者はサッチダーナンダ(サット・チット・アーナンダ)です。サットは三つの時間——過去、現在、未来のすべてにおいて不変であるものを意味します。真理に固く立脚することで、人はサットを体験することができます。チットは、完全な意識、もしくは、完全なる知識という意味です。あらゆる側面における神性を体験させてくれるものがチットです。ひとたびサットとチットを体験したなら、アーナンダすなわち至福も自然に伴います。

すべての人が幸せを望んでいます。そうした望みは自然なものであり、人間の真の性質は至福であるという事実から生じるものです。至福は神ですが、人はそれを理解していません。人は、自分が神から生じたこと、生命の底流が神であること、人の最終目的地が神であることを理解していません。人はアーナンダから生まれ、人生の基盤はアーナンダであり、人の目的地はアーナンダです。実を言えば、人生の基盤は何か、人生の目的地は何であるべきかを知るのには難しいことはありません。至福が人生の目的であるべきであり、人は真剣に至福を手に入れようと務めなければなりません。人間の体はつかの間のものであり、体を与えることのできる喜びもまたはかないものです。ですから、人は永遠のもの、つまり「神」、あるいはそれと同じものである「至福」を探し求めなければなりません。そういった至福を永遠ではない道具を通じて探し求めることは無意味です。体は肉体的な喜びしか与えることはできず、心(マインド、マナス)はせいぜい心の満足しか与えることはできません。これらは至福には相当しません。

-- *Buddha's Message* (2000年5月21日、*Summer Shower in Brindavan 2000* 第8章より)

---

「神は人の生命の中にも、すべての原子の中にも、宇宙の中にも存在する永続する要因であり、神はサット・チット・アーナンダ(絶対実在・統合意識・至福)であることを断言すること——これはバーラタ(インド)の役目です。バーラタは、全世界の幸福のために、ダルマという木を守り育て、その木からアーラーダ(霊的高揚)、アーナンダ(至福)、シャーンティ(平安)という果実を集めて蓄えなければなりません。

*Nurse the Ancient Tree* (1967年10月7日、*Sathya Sai Speaks* 第7巻第34章より)

---

牛の体の中には牛乳があります。牛乳はギー(精製バター)を含んでいます。しかし、牛はこのギー(牛乳の中の潜在的なギー)からはどんな活力も得ることはできません。牛乳は、牛から絞り出され、火にかけられ、クリーム状にするために発酵牛乳を少量入れられます。そして、牛乳がクリーム状になると、攪拌され、バターとバターミルク(乳清)に分けられ、丸められます。その後、バターは溶かされて、精製され、ギーができ上がります。このようにして作られたギーは、牛に食べさせることができ、そうすれば、牛は丈夫になります。それと同じように、考えてごらんください——神は遍在です。それでも、神は人がサーダナ(霊性修行)をしない限り、人の願いを聞き入れません。

胡麻の中には油があります。牛乳の中にはバターがあります。土の下には地下水があります。木には火が潜在しています。それと同じように、遍在なる神は、人の体と心の中にいます。神をそこから引き離して神を確

認りたいと求めるのであれば、努力をし、サーダナに励まなければなりません。そうすれば、努力とサーダナの結果として、神は自分自身であり、神と自分には何の違いもないということを悟るでしょう。アドワイタ(不二一元論)によると、これは解脱であり、英知であり、悟りを開いたということです。シャンカラは、このプロセスをアドワイタのウパーサナ(礼拝、復唱して礼拝すること、近くに座ること)と名付けています。

*Values In Later Texts (Sathya Sai Vahini より)*

神を探して疲れ果てる必要はありません。神は、牛乳の中に存在するバターのようにそこに存在し、卵の中に存在する鶏のようにそこに存在し、創造物のすべての原子に内在しています。神はどこからか来たのではなく、また、どこへも行きません。神はそこにも、ここにも、あそこにも存在します。アヌ(原子)からガナ(大きなもの)まで、小宇宙から大宇宙まで、神はすべてです。この偉大な真理を悟るためには、サーダナ(霊性修行)、すなわちカルマ(行為)が必要とされます。それがカルマヨーガ、悟りを目的として行為をなすことであり、「カルマス コウサラム」、すなわち、「聡明な態度で行われる行為」です。億万長者は、乗用車やバスなど何種類もの車を何台も持っているかもしれませんが、医者健康のために毎朝数キロ歩くことを億万長者に勧めます。医者は、そうしなければ病気になると言います。ですから、それと同じように、アグニヤーナ(無知という病い)を取り除くためには、行為を、ダルマ(正しい行い)に導かれた行為を、実践しなければなりません。ランプの中の油は前世の行動から絞られた油です。炎が強ければ強いほど、光は明るくなり、すぐに燃え尽きてしまいます。活動的に行為をなして、過去のカルマの因果応報をまっとうし、首に掛けられた重りから自由になりなさい。行為をなすことには、もたらされるであろうカルマの果報よりも多くの喜びがあります。巡礼の道のは、しばしば巡礼先の寺院での体験よりも楽しいものです。

*Sathya Sai Geetha (ii) (Sathya Sai Speaks 第1巻第30章より)*

## 神は・・・ダルマの化身

神はダルマの権化です。神の恩寵はダルマによって勝ち取ることができます。神は常にダルマを育み、ダルマを確立しています。神はダルマそのものです。ヴェーダ[インド最古の聖典群]やシャーストラ[論書]、プラーナ[古伝説]、イティハーサ[叙事詩、史詩]は、ダルマの栄光を高らかに宣言しています。さまざまな宗教の教典には、帰依者になじみ深い言葉で詳しくダルマが語られています。ダルマの化身であるダルマナーラーヤナ神に敬意を払うことは、どんな時にも、どんな所でも、あらゆる人間の義務です。

ダルマにかなった行動が創り出す川の流れは、決して涸れることがあってはなりません。その涼やかな川の流れが途絶えたとき、間違いなく災害がやって来ます。人類が現在の段階にまで到達したのは、ダルマがサラスワティー河のように人目に触れることなく地面の下を流れ、根に養分を与え、泉を満たしているからに他なりません。人類のみならず、鳥や獣たちでさえ、幸福に、充足と喜びの内に生きるためにはダルマを堅実に守らなければなりません。

したがって、世界中が幸福に満たされるためには、ダルマという水を、永遠に、そして完全に流し続ける必要があります。現在世界中で災害が荒れ狂っているのは、正義が否定され、ダルマに従って生きる重要性が信じられていないからです。それゆえ、人はダルマの本質をはっきりと理解しなければなりません。

--『生きる道 ダルマ ヴァヒニー』第1章より

## 神は・・・目撃者

神が世界を支配しているのに、神はどうして世界の不正や悲惨を黙認しているのでしょうか？ 神は悲しみや痛みには責任はありません、というのが答えです。悲しみと痛みは、私たちが犯す罪の産物です。喜びと悲し

みは、人がなした善と、人が犯す悪の結果です。神は目撃者です。神は罪を罰したり、悲しみの原因を作ったりしません。ジーヴィ(個々の魂)は始まりのないものです。言い換えると、ジーヴィに誕生はありません。しかし、ジーヴィは、自ら途切れることなく行動し、それゆえ、行動がもたらす避けられない結果を体験しなければなりません。これはすべての人が体験することであり、すべての人の心の特徴です。これは物質界すなわちプラクリティの、鉄則です。嘆きや喜びは、その人が行った行為の写しです。嘆きや喜びは、反響であり、反映であり、反応です。ジーヴィは、行動の善悪には関わることのない目撃者でいることが可能です。関わりが生じたとき、良いことをしたときは良いことを体験し、悪いことをしたときは悪いことを体験します。

--Bondage (Sathya Sai Vahini より)

---

神は報償にも罰にも関与していません。神は単に反映し、反響し、反応するのみです！ 神は何にも影響されない永遠の目撃者です！ あなたが自分自身の運命を決めているのです。善を行い、善人でいて、その見返りに善を得なさい。悪人でいて、悪い行いをすれば、結果として悪の報いを受けます。神に感謝したり、責めたりしてはいけません。あなた自身に感謝し、あなた自身を責めなさい！ 神は創造や守護や破壊が起こるようにということさえ意志しません。それらも、同じ法則、迷妄に支配された宇宙固有の法に、従っているのです。

電流を例にとると、私たちはこの蒸し暑い気温の中で扇風機を回し、涼しい風を送ってくれるために電流を使うことができます。明かりを灯すこと、人の声を拡声して聞こえ易くすることにも使うことができます。電流を使って一枚の紙を何枚もコピーすることもできます。これらの場合はすべて、電流が作り出しています。しかし、もしあなたが、電流がしてくれるこれらすべての良い面に感激し、敬意の念が少し行き過ぎて、電流が流れている電線を握ってしまったとしたら、あなたは死んでしまいます！ 電流は、創造もし、保護もし、破壊もします。それは私たちの使い方次第なのです。

--"Stone as God", Not "God as Stone" (1970年5月12日、Sathya Sai Speaks 第10巻第8章より)

---

## 神は・・・輝く魂

多くの学者や聖者、そして、そのような問題について話す権利を有するその他の者と同様に、ヴェーダやシャーストラ、プラーナもすべて、神をサルヴァヴィヤーピ、そして、サルヴァブータンタラトマと描写しています。これは、すべての場所に存在する者、そして、すべての生物の内なる実在という意味です。これに基づいて、人々の中には、「もし、神がその通りにあらゆる場所に存在し、すべてのものの中にいるならば、なぜ万人に神が見えないのか？」と議論を仕掛ける者もいます。そういったものすべてに対する答えは次の通りです。すなわち、五大元素でできている肉眼に、どうやって五大元素を超越するものを見ることができるのでしょうか？

光を反射しないものを照らすことはできません。しかし、炎は自ら発光し、周りのすべてに光を注ぎます。神は発光体です。神はすべてを照らします。神は神の栄光の顕現にはかならない自然界を超越しています。ですから、神は英知の目、すなわち、神の恩寵によってのみ得られる目を通してのみ、見ることができるのです。したがって、神を礼拝することはサーダナ(霊性修行)の欠くことのできない一部分です。自分自身をうまく見ることができない者は、決して他人を見ることも、自分の外側にあるものを見ることもできません。神の恩寵を保証してくれるサーダナに従事しなさい。その恩寵により、グニャーナネートラ、英知の目が与えられます。神は帰依の道(バクティヨーガ、信愛の道)によって容易に到達が可能です。

ギーター ヴァーヒニー 第20章より

---

油は胡麻全体に存在しています。ギー(精製バター)は牛乳の一滴一滴の中に存在しています。香りは目には見えない形で花の中に存在しています。果物には甘い果汁が詰まっています。どの材木にも火が潜在しています。これらと同じように、神は微細な形をとって全宇宙に内在しています。神は特定の国や特定の体

に宿っているのではありません。目の視力や耳の聴力のように、神は、心(マインド)の中にチャイタンニヤ(意識)として存在しています。宇宙は、目に見えない至高の存在の、目に見える現れです。

神がこのように自分のすぐ近くにいるにもかかわらず、人は無知ゆえに、神をあちこち探しに行きます。神は、サット・チット・アーナンダ(絶対実在・統合意識・至福)、遍在意識として、すべての人の中で輝いています。

空で輝く太陽が映ったさまは、海にも、河にも、湖にも、井戸の中にも見えます。映った姿(場所)は違っても、太陽は同一です。神は、首飾りの玉をつないでいる目には見えない糸のように、人の中に存在しています。全宇宙は、神が浸透しており、目で見ることのできる神の現れなのです。

*Offer Everything to God (1995年9月5日、Sathya Sai Speaks 第28巻第24巻より)*

---

宇宙は多くの力で満ちあふれています。全知、全能、遍在の、一なる力が万物のすべてに浸透しています。この神聖な力は、砂糖水の中の砂糖のように、原子の一つひとつに内在しています。ウパニシャッドはこれを、「ラソー ヴァイ サハ」、すなわち、遍満する甘さと呼んでいます。神は甘さの権化です。この甘さはあらゆる場所に存在しているにもかかわらず、その遍在を認識することは不可能です。とはいえ、神性の存在に気づくことは万人に可能です。

砂糖黍きとうきびの中の甘さ、ニーム(苦味と薬効で知られるインドの木)の中の葉の苦さ、唐辛子の中の辛さ、レモンの中の酸味、木の中の火[燃える性質]——これらはすべて神の存在の端的な証拠です。植物は種から芽を出します。鳥は卵から孵かえります。新生児もいつの日か母親となります。これらはすべて、神性の存在の生きた証あかしです。荘厳な山の頂、滔とうとうと流れる川、深い海、こんもりと茂った森、色とりどりの庭を見ると、人は高揚します。これらの現象の基にあるものは何でしょう？ それは神の存在に他なりません。

--『サティヤ サイ ババ 1995年夏期講習シュリーマド バーガヴァタム』第12章 教育の真髄より

---

神は容易に知覚できるものでもなければ、容易に悟れるものでもありません。神を語ることは容易たやすいことです。神の遊戯や神の奇跡に意見を述べるのは容易いことです。しかし、これらを完全に理解することは非常に困難です。何か悪いものを見てカラスのように騒ぎ立てるのは、良いことはありません。何か善いものを見てカコーのように歌うほうが良いのです。人によって好みは異なります。ある人にとって美味しい甘いものは、他の人には毒となります。このような異なった傾向を持っていて、人々はどうのようにして神を理解できるでしょう？

バーラタ(インド)の太古の聖賢たちは、多くの霊的な探求を重ね、その研究によって書かれた聖典に、神に関する自分たちの体験を公言してきました。ウパニシャッドは「ラソー ヴァイ サハ」と宣言しています。つまり、砂糖が砂糖きびの中に存在するように、あるいは、牛乳の中にバターが存在するように、神はすべてのものの中に存在します。神は、善の中にも悪の中にも、真理の中にも、非真理の中にも、功德の中にも、罪の中にも存在します。このような状況であれば、人は何が偽りで、何が正しいかを、どのようにして判断するのですか？ バガヴァッドギーターは次のように宣言しています。「私(神)の魂はすべてのものに宿る魂である」。この真理を悟る者は、サマツワ(心の平穩)を体験するでしょう。

--*Spiritual Significance of Shivaratri (1996年2月17日、Sathya Sai Speaks 第29巻第5章より)*

---

## 神は・・・唯一無二

あなたは、神と共にいることによって、アーナンダ(至福)を体験すべきです。神こそがあなたの真の財産です。あなたがアーナンダを経験するとき、あなた自身が神になるのです。相違を手放しなさい。すべては神の中にあります。この一体性を心に留めておきなさい。

学生として、あなた方は学問を追及するかもしれませんが、あなた方の勉強はすべて物質レベルで行われています。そういう勉強と共に、精神次元における一体性の原理について黙想しなさい。アッラー、イエス、ラーマ、クリシュナ等々、名前は違いますが、神は一つです。多様性の中の一体性に対する断固とした信念をも

ちなさい。あなたが不変にして永遠の「真理の原理」を実感認識することを可能にしてくれるサーダナ(靈性修行)を行いなさい。

~Experience of Unity is Real Satsang (2003年3月1日午後のマハーシヴァラートリの御講話より)

---

人々の中には、ヴェーシカターシュワラ神としての神を礼拝し、その姿の神を認識したいと願う者もいます。誰がその姿を創ったのでしょうか？ 神をその姿に描いたのは人間の心(マインド)であり、たとえば、有名なラヴィ・ヴァルマといった画家たちです。ラヴィ・ヴァルマは神をラーマやクリシュナ等々さまざまな姿に描きました。そうした姿はすべて人間が作ったもので、元々のものではありません。皆さんはラーマやクリシュナやシヴァを礼拝し、その姿をとったものとして神を認識しているかもしれませんが、しかし、根本的には、神は一つであり唯一無二です。神は無形であり、名前をもたず、属性をもたないブラフマンです。この根本的な真理は、「エーカメーヴァ アドヴィティヤーム ブランマー」(神は唯一無二である)という格言に説かれています。

それにもかかわらず、さまざまな時代にさまざまな人々が名前と姿によって惑わされます。これはすべて当人のイマジネーション(想像)だと言うことができます。事実、このイマジネーションそれ自体が、この世の困難のすべてを引き起こす大元なのです。名前と姿は違っていても、神はただ一つです。

誰かを悪い人だと考えるなら、その人は悪人に見えます。反対に、良い人だと考えれば、本当に良い人に見えます。相手に対するあなた自身の気持ちや考えが、善悪の違いのすべてを作り出しているのです。それらはすべて、あなたの思考から生じます。ですから、物事はあるがままに受け取らなければなりません。

~Realise Atma Thatwa By Constant Practice (2009年7月20日の御講話より)

---

## ハート 神は・・・心に住む

皆さんがどこを見ても、神は存在しています。星々から小さな丘にいたるまで、昆虫から象にいたるまで、あらゆるものはブラフマン[神]で満ちています。あなたのハートを神聖な感情で満たしなさい。神はフルダヤヴァースィ(ハートに宿るもの)として知られています。ここでのハートとは心臓のことではありません。もし、心臓が肥大すれば、病気という結果をもたらします。私がここで述べているのは、万人の内に存在する霊的なハートのことです。ハートの拡大があれば、心は寛大になります。これとは反対に、ハートの縮小があれば、あなたは狭量な感情しか持てないでしょう。ですから、卑しい性質を心に抱いてはなりません。

人間としての生は非常に神聖なものです。だからこそ神は人間の姿をまとうのです。それゆえ、ハートの純粋さを育て、神聖な生き方で人生を過ごしなさい。私が講話を行ったり、皆さんをバジャンを歌うことに従事させたりするのは、ただ皆さんのハートを広げるためです。早朝の時間帯にナガラ サンキールタン(大勢でバジャンを歌いながら通りを練り歩くこと)に参加するとき、皆さんのハートは至福に溢れているでしょう。自分の満足のためだけに歌うのでは十分ではありません。皆さんは地域での歌唱に真心をこめて参加し、自分の喜びをすべての人と分かち合わなければなりません。喉を全開して神の栄光を歌い、すべての人に神の御名の甘露を飲ませてあげなさい。あなたの目的は、常にあらゆる仕事においてハートの拡大を成し遂げることにあるべきです。そのとき初めて、「人間」という名前はあなたにふさわしいものとなります。寛大な心を持ち、自分の幸せを皆に分け与えなさい。

現在、利己主義と私利私欲が高まっています。人々は自分のハートを清める努力をしていません。反対に、人々は自分の過ちを隠して名士のふりをします。人々は自分の家族や友人の幸福だけに関心を抱いています。皆さんは、他の人々の気持ちや幸福についても気遣うべきです。愛は神です。愛に生きなさい。愛は「私」や「私のもの」という狭量な感情で汚されるべきではありません。万人は一なる精神で仲良く暮らすべきです。

~Develop the Spirit of Oneness (2005年11月19日の女性の日の御講話より)

---

この広い宇宙の中で、あなたは霊性の原理の見解を基に、宇宙的視野を培わなければなりません。狭い視点からでは霊性を求めることはできません。霊性修行と考えられている礼拝や瞑想の形態はすべて、実を言うと、心を喜ばせるための精神的な脱線です。神は、父、母、兄弟、友人等々と描写されています。しかし、私たちと神は一つであることが認識されれば、これらはすべて不必要なあだ名です。あなたは神の内において、神はあなたの内にいるのです。そこに二元性を感じる余地はありません。

霊性とは、基本的に、神と一つであることを悟ることを意味します。神とあなたは離れた存在ではありません。ひとたびその確信を得たなら、どんな霊的サーダナ(修行)も必要ありません。この唯一性は単なる理論的な概念であってははいけません。それは生きた現実でなければなりません。そうすればあなたは真の自由を体験することでしょう。それは、魂の解放、肉体と心を伴った関係からの離別です。自分に本来備わっている神性を体験したとき、あなたは悲哀と困難から自由になるのです。

--The Spirit of Freedom and freedom of Spirit (Sathya Sai Speaks 第23巻第21章より)

---

## 神は・・・全能

神はマハーシャクティ(至高のエネルギー)であり、ジーヴァ(個人)はマーヤーシャクティ(惑わす力)です。神は実体であり、ジーヴァはその影でしかなく、見掛け、幻影に過ぎません。この私でさえ、皆さんの間に入って行くためには、マーヤーシャクティを身にまとわなければなりません。それは、警官が盗賊を逮捕して罰するためには、盗賊団に潜入して盗賊の衣服を着なければならぬのと同じです！ 神はマハーシャクティを弱めないままに降りて来ることはできないのです。神は、人々のバクティ(神への愛、信愛、帰依)の対象となり、献身的な奉仕の対象となることができるように、光彩を弱め、輝きを制限して降臨しなければならないのです。

--God As Guide (1956年8月1日、Sathya Sai Speaks 第1巻第3章より)

---

すべての力を有し、万物に遍満している神に、いったい誰が、特定の名前を付けることができるでしょう？ 大地は雨水を吸収して、作物に水を供給します。その結果、私たちは収穫を得ることができます。このように、母なる大地は、私たちに食物を与えて、生命を維持してくれます。水は私たちの生存にはどうしても欠かせません。人は食物がなくても何日かは生きていけますが、水がなければ誰も生存できません。水は神からの贈り物です。水は祈りによって初めて手に入れることができるもので、それ以外の手段では入手できません。多くの国や土地で、人々は礼拝を行い、特別の祈りを捧げて、水を与えてくださいと、神の恩寵を求めます。貧しい人であれ、億万長者であれ、すべての人が神に祈らなければなりません。というのも、食物や水を与えてくれるのは神だからです。人間は自分の力だけで食物や水を創ることはできません。人間は、健康的な生活を送るためにはどんな種類の食物が必要かということすら知りません。人はそれを理解するよう努めるべきです。

何であれ、神のすることは世界の幸せのためなのです。皆さんは、世界は神の姿そのものであることを理解しなければなりません。創造主と被造物は別々のものではありません。人は、世俗的な欲望を満たすために神を礼拝すべきではありません。私たちは、神に到達するために神に祈るべきです。神は帰依者に恩寵を注ぎ、必要なものはすべて与えます。被造物にとって、何が役に立つかを知っているのは神のみです。あなたが必要とするものは、時が満ちたときにすべて神が与えてくれます。あなたが過度の努力をしなくても、神はあなたにふさわしいものを与えます。欲望が満たされないときに落胆して神を責めるのは、真の帰依者の特質ではありません。神の恩寵を得る方法を見つけて、神に到達する努力をするのが、帰依者の義務です。

--Love and sincere prayers bring success in your life (2004年12月25日のクリスマスの御講話より)

## 神は・・・時の支配者

自分自身の変容を試みない人は、自分のあやふやな信仰を責める代わりに、自分の苦しみを神のせいにする傾向があります！ そのような人は、あまりにも早くから自分は帰依者であると名乗り、多くの恩寵を期待するがあまりに、神を責めるのです。そんなことをしても恩寵を得ることはできません。神は帰依者を自分のものとして受け入れなくてはなりません。人は、価値あるものを選ぶために、自分の識別心を駆使し、ゴミをふるいにかけて捨てなければなりません。プンニヤム、すなわち「善い行い」をするということは、他者に対して無私の奉仕をするという意味です。人は、自分を浄化し癒してくれる善人との友情を、探して勝ち得るために、悪い人々から逃れなければなりません。

人間は時間によって消滅させられます。神は時の支配者です。ですから、神に救いを求めなさい。神を、あなたのグル(師)、あなたの道、あなたの主としなさい。神を崇め、神の命令に従い、あなたの感謝をこめた敬意を捧げ、あなたの記憶に神をしっかりと留めなさい。これが神をあなたの実体として実感認識する一番容易な方法です。これが唯一の道です。

--*God Is the Only Sadguru* (1985年7月2日、*Sathya Sai Speaks* 第18巻第14章より)

---

愛の原理を伴わない霊性修行は無益です。人々は長時間瞑想するために共に座りますが、心がじっとしていないため、神を体験することはできません。このようなことをして時間を無駄にする代わりに、有益な仕事をしたほうがましです。神は時間の化身です。ですから、時間を無駄にははいけません。「サルヴァダー サルヴァカーレーシュ サルヴァットラ ハリチンタナム」(どこでも、いつでも、どんなときでも神を想いなさい)。純粹で無私の愛が、神に到る唯一の道です。この世的な欲望が満たされても、それは一時的な幸福を与えるだけです。ですから、あなたの欲望をよく見てみなさい。あなたの終着点は永続する永遠の至福です。それはあなたの中にあり、愛のみによって到達することができます。

あなたの体の細胞の一つひとつには、あなたの生体すべての詳細が収納されています。実際、あなたの体のすべての細胞が、あなたの全身を保持しているのです。あなたの体には何億もの細胞があります。あなたの姿が小宇宙の中で各細胞と四肢に内在しているのと同時に、あなたの体はあなたの大宇宙的な姿でもあります。それと同じように、あなた方一人ひとりが宇宙的な神の姿(ヴィシュワ ヴィラート スワルーパ)なのです。あなたはこの真実を十分に認識する努力をしなければなりません。

--*Complete Surrender Confers Bliss* (1999年11月23日、*Sathya Sai Speaks* 第32巻その2第16章より)

---

私は自分のために行為をしているわけでも、何かを手に入れるために行為をしているわけでもありません。行為をすることによって達成する必要のあることなど、私には何もありません。私がすることは何であれ、世界の安寧のためです。皆さんはこれを理解し、私の手本に倣うべきです。神は、単なる教訓によってではなく、実践によってあらゆることを教えます。正しい探求を通してのみ、この真理を理解することができるのです。皆さんは誠実さと揺るぎない信念を持って探求すべきです。もし信念に欠けるなら、どれほど長く努力しても何一つ理解することはできません。私の踏む各ステップには明確な目的があります。私の行為の一つひとつは、ダルマの一つの側面を反映しています。この世界において、私のサンカルパ(意志)なしに起ることは何一つありません。しかし、皆さんは私のサンカルパとダルマを理解することができません。神は自分のためではなく、あらゆる生き物のために降臨したのです。神は実在であり、世界はその反映です。反映が実在に従うのは当然のことです。神がすることは何であれ、皆さんの安寧のためです。同様に、皆さんのすることは何であれ、神を喜ばせるものであるべきです。

あなたは、自分のすべての行為は神に喜んでもらうことを意図としている、と公の場で宣言するかもしれませんが、しかし、だからといって神が本当にあなたのことを喜んでいるとは限りません。神は、あなたがパーパ ビーッティ、ダイヴァ プリーッティ、サンガ ニーッティ(罪への恐れ、神への愛、社会の道徳)を培ったときのみ、喜ぶのです。道徳に欠けていれば、あなたは真の意味で人間と呼ばれることはできません。道徳は人

間であることの証明です。ニーッティ(道徳)を守る者が、真のマーナヴァ ジャーティ(人類)です。

--Uphold Truth Under All Circumstances (2004年4月11日のケーララ州青年キャンプの御講話より)

---

舌は邪悪なことを話すべきではありません。目は邪悪なものを探して見ようとすべきではありません。耳は邪悪なものを聞こうとすべきではありません。すべての者に内在する神はすべての者を神聖にします。他の人を蔑むことは、神を蔑むこととなります。慣行に従って、他の人を「ソーダラ ソーダリマヌラーラ」(兄弟姉妹の皆さん)と呼ぶとき、皆さんは、神は「父」である、そして、その他の人は誰もが兄弟姉妹である、という感覚を培わなければなりません。この兄弟関係は、血縁の兄弟関係よりも本当であり、より強く結びついています。ですから、皆さんが得ようともがいている父親の財産は、どのようにも欠けることなく、すべての人々と分かち合うことができるのです。プールナ(完全なるもの)からプールナを引くとき、残るものはプールナなのです。(プールナ - プールナ = プールナ)

--Poorna minus Poorna is Poorna (1966年10月19日、Sathya Sai Speaks 第6巻第32章より)

---

神は常にあなたと共にいるという信念を持ちなさい。母親は子どものことを忘れることがあるかもしれませんが、神はあなたを決して忘れません。神はどんな母親よりもあなたの近くにいます。決して神を忘れてはいけません。プラシャーンティ ニラヤムに来るすべての人が「プラシャーンティ」(至高の平安)を体験していますか？ いいえ、人々はおしゃべりをし過ぎていて、あちこち動き回っています。何のために、あなた方はここへ来たのですか？ あなたは誰の住居(ニラヤム)に来たのですか？ なぜ、あなたは落ち着きなく歩き回るのですか？ この黄金の機会を、心の平安を得るために使いなさい。あなたがここにいる間、できる限りたくさん霊的体験を積みなさい。そして、家に帰ったら、牛が反芻するように、その体験を何度も思い返しなさい。

あなたはここへ、神との関係を深めるために来ました。それにしっかりと掴まっていなさい。ここで学んだことを最低一つでも実践に移しなさい。少しの実践もない、山のような頭だけの知識が何の役に立つのですか？

--Recognise Your Divine Identity (1997年11月23日、Sathya Sai Speaks 第30巻第32章より)

---

最近では、人々は至福を得るために神聖な書物を読みます。しかし、これらの本にはみな、限界があります。聖典を読んで無限の至福を得ることはできません。無限の至福を得るためには無限の書物を学ばなければなりません。この世自体が無限の書物です。この世の中から学ばなければならないことは、数多くあります。

あなたの友達是谁ですか？ それは同級生やルームメイトではありません。ただ神のみが真の友であり、永遠の友です。この友の助けを借りて、初めてあなたは世界という無限の書物を学ぶことができるのです。この無限の書物を学ぶとき、皆さんは仏陀の五つの重要な教えを実践に移さなければなりません。それは、サムヤク ドリシュティ(正見)、サムヤク バーヴァン(正思)、サムヤク シュラヴァナム(正聞)、サムヤク ヴァーク(正語)、サムヤク カルマ(正業)です。真の人間とは、真実の道をたどる者のことです。真実、正しい行い、そして犠牲が、人生の道となるべきです。仏陀は、「ブッダム シャラナム ガッチャーミ、ダルマム シャラナム ガッチャーミ、サンガム シャラナム ガッチャーミ」(ブッダに帰依し奉る、ダルマに帰依し奉る、社会・法に帰依し奉る)と言いました。これは、ブッディ(知性)はダルマの道を辿るべきであり、ダルマは社会の中で培われなくてははいけない、という意味です。そうして初めて、国は繁栄します。

これは SAI という言葉の内的意味でもあります。「S」は Spiritual change(霊的な変化)を意味し、「A」は Association change(社会の変化)を意味し、「I」は Individual change(個人の変化)を意味します。この三つの変化が起ったとき、初めて人の心は純粋で神聖になるのです。

--Control Your Senses (1999年5月30日、Sathya Sai Speaks 第32巻その1第15章より)

---

## 神は・・・演出家

奉納はさまざまな方法で行われます。私たちが食べる食物のことを考えてみましょう。食べる前に食物を神に捧げなさい。すると、食物は清らかで力に満ちたものになります。神の栄光を讃えるために行う行為は、そのようにして清らかで力に満ちたものに変えられます。そのような行為は、その行為をした人も、それによって恩恵を受けるもの、すなわち社会も、傷つけることはできません。というのも、その行為は愛に満ちており、愛は神だからです。神は、この人形劇の演出家、糸を操る者です。幕の後ろに回って神を見なさい。今は幕が神を隠しています。私たちに美しいものを見せるため、重く水滴を含んだ雲の暗さを見せるために、神が糸を操っているのを見るには、ただ、花の裏側をのぞき込み、雲の背後を見つめるだけでよいのです。同様に、あなたはただ、自分の思いの背後を見つめ、自分の感情の背後を見つめるだけでよいのです。あなたはそこに、内側から動機づけをしている者を見つけることでしょ。

--Forsake the Fete of Fancy (1969年10月15日、Sathya Sai Speaks 第9巻第23章より)

神は創造者です。神はこの宇宙のすべての者を創造しました。しかし、創造物に関する責任は、神の手の中にはありません。神は人間にすべての能力を与えました。しかし、神は能力を使うに当たっての条件を付けました。それは、人は自分の好きなように生きてよい、創造されたすべての物質を使ってもよい、それは、誰からも、たとえ神であろうと異議を唱えることはできない、という内容です。しかし、自分の行為の結果からは逃れられない、と神は宣言しました。このことは正しく解釈されなければなりません。

たとえば、今朝のレクチャーで良い例が説明されました。風は吹き、雨は降ります。ドワーパラの時代、インドラ神はひどい豪雨を降らしました。その大雨の被害に遭っていた人々は、神(子ども時代のクリシュナ)に祈りました。「おお、神様！ 私たちもここにいる牛たちもこの豪雨に苦しんでいます。この雨から私たちを救ってください」。神は応えて言いました。「僕には雨を止めさせることはできない。自然界において起こらなければならないことは、断行されなければならない。しかし、この弊害からあなたたちを護る権利が僕にはある。雨は自然の法によって降る。この自然現象は、自然の趣くままに断行されるべきだ。けれども、あなたたちの帰依心と祈りを考慮して、僕がこの山を持ち上げて、あなたたちすべてに避難の場を与えよう。でも、僕は雨を止めさせることはしない」(クリシュナ神によってゴーヴァルダナ山が持ち上げられた逸話より)。

さて、風はランプを吹き消す力を持っています。神は光を放つ力のあるランプを授けました。風の力と光の力は神が授けたものです。しかし、風にランプの火を消すなど命令するのは愚かなことです。人間にできることは、ランプに火屋(覆い)を付けて風からランプを守ることです。これは人間の能力の範囲内です。

-- From knowledge to Wisdom (1992年5月21日、Sathya Sai Speaks 第25巻第14章より)

## 神は・・・唯一の避難所

大海原の真ん中で紺碧の水の上を飛ぶ渡り鳥には、航海中の船のマストしか休む所はありません。それと同じように、輪廻の海の嵐に巻き込まれた人にとって、神は唯一の避難所です。どれだけ遠くに飛ぼうとも、鳥は休める所を知っています。この知識は鳥に勇気を与えます。マストの全体像は鳥の頭の中にしっかりと入っています。その形は鳥の目の中に焼きついていて、神の御名はあなたにとってのマストです。御名を覚えていて、さらに御名と御姿と結び付け、その御姿をあなたの心の目にしっかりと焼き付けなさい。それは心の奥で光を発しているランプです。御名を口にすれば、心の闇も、外の闇も一緒に追い払ってしまいます。内に平安、外に兄弟愛——これがナーマジヤパム(神の御名を繰り返し唱えること)に従事する人のしるしです。

-- Near and Far (1962年3月7日、Sathya Sai Speaks 第2巻第33章より)

---

高潔な性質を養いなさい。そうすれば、私はあなたにすべてを与えましょう。高潔な性質を養い、それらを教える者には、それどころか私自身をも与えましょう。実際、私はそのような人々のためだけに生きているのです。私はその人たちから何一つお返しは求めません。人徳と高潔さをそなえた生活を送りなさい。あなたの両親と、母校と、スワミに良い評判をもたらさなさい。

--*Character Is The Goal Of Education* (2004年1月14日のサンクラーンティの御講話より)

---

神は常に帰依者の祈りに応える用意があります。しかし今日、「ディヴォーション」(バクティ、信愛)として認識されているのは「ディープオーシャン」(深い海、世俗の生活という海にどっぷり浸かっていること)です。人々は「ディヴァイン」(神)について話しますが、興味があるのは「ディープワイン」(深みのあるワイン)だけです。人々は「コンパッション」(慈悲)について話しますが、関心があるのは「ファッション」(流行)だけです。人々は「コーオペレーション」(協力)を口にしますが、「オペレーション」(作業、取引、作戦)にふけているだけです。バクティはもったいぶった見せ物に成り下がってしまいました。

真の知識は、道徳の極限の危機に対して立ち向かったときに、初めて得られます。それが、敵対する二つの軍隊の間に置かれた時にアルジュナが直面した状況でした。パリークシット(アルジュナの孫息子)は、自分にはあと一週間の余命しかないと知った時、これに似た危機に直面しました。このような危機の時にこそ、人は神を想い、神の助けを求めるのです。

--*Devotion and Divine Grace* (1983年12月31日、*Sathya Sai Speaks* 第16巻第32章より)

---

人は、光、熱、空気、水といった、無報酬で数えきれない恩恵を与えてくれる五大元素に対して、感謝の念がありません。人は、電気や水道といった大変多くの細々とした生活必需品に対して、料金を払わなくてははいけません。しかし、人は、世界を照らす太陽の光にどれだけのお金を払っていますか？ 太陽の光は神からの贈り物です。あなたは、心地良いそよ風や、土砂降りの雨に、いくら払っていますか？ 神はこのような貴重な恩恵を、人に無償で提供しています。これらすべてに対して、人は神にどのような感謝の念を表していますか？ 五大元素への感謝を示すただ一つの方法は、スマラナ(神の御名を途切れることなく唱えること)です。私たちは、人生における多くの些細な奉仕に対して、感謝の念を表しています。しかし、人生において最も貴重な恩寵を与える神に、返礼として何を捧げていますか？ 神の御名を唱えることで神に感謝の気持ちを表すとき、あなたは音楽会のようにではなく、心の底から唱えるべきです。ラーヴァナを例にとると、ラーヴァナは、五つの音節から成るシヴァのマントラ、「ナマツ シーヴァーヤ」を常に唱えていましたが、自分の悪魔的な性質を一切手放すことはありませんでした。なぜなら、ラーヴァナはマントラを機械的に唱えていただけだったからです。

-- *Welcome God's Tests* (1997年9月14日、*Sathya Sai Speaks* 第30巻第21章より)

---

## 神は・・・あなたのもの、そして、あなたは神のもの

一瞬一瞬があなたの人生における新しい瞬間です。新年を祝い、年頭の決意を決めるのに、一年間待つようではいけません。毎秒を、ハートを浄め、愛で満たすために使いなさい。そうすれば、神はあなたのものであり、あなたは愛と共にあるということを悟ります。

真のバクティ(信愛)は神を認識するためにあります。バクティとは、何の欲望も見返りも望まずに神を愛することを意味します。このようなバクティは良い行いを通じてのみ、育てることができます。正義なくしてバクティはあり得ません。体の清らかさが健康に欠かせないように、心の清らかさは神の至福を楽しむために欠かすことができません。

世の中から得られるどんな知識よりもまさるものは、アートマグニャーナ(真我の知識)です。真我の悟りによって得られる至福に比類するものはありません。それは、エゴの感覚が破壊され、神への祈りに満ちた服従ができてのみ、成し遂げることができます。祈りは口から発せられるものではなく、心から湧き出るものでなければなりません。口先だけの祈りは、一般電話の電話番号に電話をかけるのと同じです。それだけではあなたの話したい人に届きません。心からの祈りは「コレクトコール」(受信者指定呼び出し)でかけるのと同じです。それは神へ直通でつながります。

-- *Devotion and Divine Grace* (1983年12月31日、*Sathya Sai Speaks* 第16巻第32章)

誰もが帰依者のように見え、誰もが自分の犠牲の精神を公言します。誰もが自分はサーダカ(霊的向上を目指す人)だと言います。信者は皆、自分は神を求めていると言います。あなたはそれが、神を求めるいわゆる帰依者にせよ、真の帰依者を探している神にせよ、探求しなければなりません。サーダカが神に仕えているのでしょうか、それとも、神がサーダカに仕えているのでしょうか?—これが問題です。サーダカがしている奉仕は些細なものです。神が与えてくれたものを神に捧げるのは、ガンジス河にガンジス河の水を捧げるようなものです。神が帰依者に奉仕している、というのが真理です。神から与えられた能力はすべて、神への奉仕に使われるべきです。神を探しに行く必要はありません。神は常に、本物で忠実な帰依者を探しています。サーダカは、自分の欲望を満たすために神へと近づいています。取るにたらない一時的な恩恵を追いかけしています。サーダカは、真の愛の本質、すなわち、すべてのものの根底にある神性を理解しようとしていません。今日のサーダカは、自分は道徳的義務を果たそうとしない自己欺瞞者であることを自ら証明しています。

道徳的な行為の真の評価の尺度は、公言したことと実践が一致しているかです。道徳は、社会が特定の時間や場所に個人や集団に向けて定めた、正しい行いの規則を実行することにあります。もし、自分が公言した言葉と自分の行動が結びついていなければ、そこに道徳は存在しません。

-- *The Most Precious Period* (1984年1月13日、*Sathya Sai Speaks* 第17巻第1章)

皆さんは私の理想を理解しなければなりません。ひとたび私があなたは私のものだと言え、私は絶対にあなたを見捨てません。あなたは私を忘れるかもしれませんが、私はあなたを絶対に忘れません。あなたは私に憎しみを抱くことがあるかもしれませんが、私はあなたに憎しみは持ちません。この世において、私に敵はいませんし、私は誰に対しても嫌いであるということはありません。私は常に約束を守ります。常に保護するために歩み出て、絶対に引き下がりません。ところが、人々の中には、スワミがスワミのものとして受け入れた後でさえ、自分に困難が降り掛かるのはなぜか?と聞く人がいるかもしれません。どうして彼らは苦しまなければならないのでしょうか?それは私の過ちではありません。私は常に約束を守ります。彼らは自分の約束を忘れ、神聖さを無くしてしまったために、苦しんでいるのです。私が自分の言った言葉を取り消すようなことは、絶対にありません。私は誰かを苦しめることは絶対にしません。最後の瞬間まで、私はあなたと共に、あなたの中に、あなたの下に、あなたの上に、あなたの周りにいます。

多くの人がこの真実を理解しようと努力していません。人々は自分が苦しんでいる理由を探求しません。自分の心の変化が、その主な原因です。揺れる心と、感謝の気持ちがないことに、その責任があります。私の前に話をしたラヴィは、神はあなたの母親よりも近くにいると言いました。私が実の母親より遥かにたくさんの愛を注いでいるにもかかわらず、感謝の気持ちを表さない人たちがいます。私はあなた方の感謝の気持ちを期待しているではありません。けれども、私が私の本分(ダルマ)を果たしているとき、あなたも同様に自分のレベルであなたの本分を果たさなければなりません。

-- *Bhagavan's Assurance to Devotees* (1998年9月29日、*Sathya Sai Speaks* 第31巻第35章より)

出典: "The Sai Ideal" p 61-143

翻訳: サティヤ サイ出版協会